父の戦死　家族　そして今思う事

鎌倉市支部　中村ヤスヨ（子）
戦没者　吉田　酉松
戦没地　旧満州

私の父は昭和十九年に出征し、二十年に戦死したと聞いております。私が四才で弟が二歳の年でした。父は常日頃からお国の為に役立ちたいとの願望を持っており、晴れて出征できる事に誇りを持って戦地へ赴いて行ったと、私が大きくなってから母より聞きました。今私が大人に成って考えますと、妻と母親そして幼子を置いて戦地へ赴く心中はいかばかりかと察し、涙がこぼれます。私には父の思い出は無く、顔さえも覚えておりません。祖母から聞いた話では、父は電機会社に勤務しており八人の部下を束ね係長として立派に役職を果たし、将来を嘱望されていたとの事です。そして家庭では人一倍子煩悩であったようです。

昭和二十年の戦死の知らせがあった時でしょうか、母と祖母が声を上げて泣いていた家の廊下での光景を、私はキョトンとして見ていた記憶だけが鮮明に今も残っています。我が家に一大事が起きた事も分からない子供でした。今振り返って見ますと、父の戦死の後、祖母と母は必死になって私達を育ててくれました。特に母は苦労のあと五十二才で亡くなる迄、辛い辛い人生では

©2011_財団法人神奈川県遺族会

なかったかと今にして思いを寄せております。この度記念誌に投稿できますチャンスを頂きました事で、亡き父母への思いに向き合える事に成り感謝でございます。私は靖国神社への参拝の折「お父さん」と心の中で呼びながら深く深く頭を下げます。そして父の心安かれと祈っております。これ迄色々と遺児としての気持、そして母や祖母のお話を致しました。

ふと現在の日本の状況を省みると暗澹たる気持になってしまいます。日本国の未来の為にと自らの命を捧げた父達は、この日本の今を見たらどの様に思われるでしょうか。現状は国民が戦争のあった事すら忘れ、新聞等のマスメディアは日本が悪かったと宣伝し、国民の代表である総理をはじめ閣僚達が靖国神社への参拝を中止する。どうしてこの様な情けない国になってしまったのか、英霊の嘆きが聞こえます。A級戦犯が合祀されているとして参拝しないよう中国、韓国から云われ反論もなしでやめてしまう日本の指導者はあまりにも残念な方々です。

A級、B級、C級戦犯という言葉は日本にはありません。東京裁判で戦勝国がつけた名称です。戦争には勝と負があります。だからと言って勝った方が勝手に断罪する事は許されるはずがありません。

昭和二十八年八月の閣議で日本には戦犯はいないと言う決議が、社会党、共産党を含め全会一致で承認されています。戦勝国もこれを認めています。この重い決議を今こそ内外に示し、日本国民共通の思いとすべきだと思います。日本国が悪かったのだと唱える進歩的文化人の方達に、戦後の自虐史観は間違いだと勇気を持って正して行く必要があります。それでなければ、父をはじめ靖国神社に祀られている英霊が安らかに鎮まる事はありません。主義主張を超えて政治を司

©2011_財団法人神奈川県遺族会

る人々が、日本国の為に命を捧げた方々に「ありがとう」と感謝の気持を捧げてほしいと願っております。英霊と私達の心安まる靖国神社は大切な所でございます。

©2011_財団法人神奈川県遺族会